



た。(この項、高野)

3. 阪神大震災の布絵の展示と、関東大震災布絵づくりワークショップ

3-1 阪神大震災の布絵の展示

さて、この展示では、さらにもうひとつ重要なことを企てました。それは、阪神大震災を体験した人々による布絵を展示したことです。この布絵は展示場に飾りはしませんが、この布絵を見るということに主眼があるのではなく、これを参考に震災絵画展を見た方々にそこで感じたものを布絵に表現してもらうための参考作品として展示しました。そのため、公開研究会を開催した翌日の10月31日に一日かけて布絵づくりのワークショップを持ちました。このワークショップの成果はこのニューズレターの表紙を飾る2つの布絵となりました。

このことについて多少説明をいたします。わたしたちは美術の専門家ではありませんので、震災画を展示するという目的は美術としての絵画をみてもらうというつもりはありませんでした。関東大震災とはどういうものであったのかを絵をみて考え、こうした過酷な体験をした横浜という都市に住む者として、震災体験を想像してもらうための材料を提供しようというものでした。それも学園祭の一環として企画した意図は、若い学生諸君に関東大震災についてじっくり考えてもらうための機会を作ろうということでした。また、単に考えてもらうだけでなく、展示場で感じたものを布絵という形で表現してもらい、一種の擬似体験を通して過酷な体験をした人々が何を頼りにそれを乗り越えようとしたのかを想像する機会をともに持とうというものでした。

これは実際に作られた布絵の経過を説明することでしか説明できません。以下はこの布絵づくりに参加された人たちの体験談から経過がある程度わかるようにピックアップしたものです。



写真5 「阪神・淡路大震災共同布絵づくり」で作成された布絵

3-2 関東大震災布絵づくりワークショップ

10月30日のシンポジウムは台風の影響で昼休みを短縮し1時間繰り上げ、さらに最後の講演者の及部克人氏のお話は20分で済ませていただき、翌31日のワークショップへ引き継ぐことで了解いただきました。

31日には台風は過ぎ去り天候も青空がすこし顔を出した程度でしたが、学園祭は1日だけの開催となったものの多くの人たちが訪れ、大変な賑わいとなりました。その余波であり学生たちが関心を示さない「関東大震災」ですが、77人の入場者がありました。そのなかからワークショップへの参加者も得られ、12人が集まりました。及部克人先生の指導で、この12人が仲間となって布絵づくりに挑戦。このようなワークショップでは、素材の準備やプログラムの進行を支える助言者を“ファシリテーター”と呼ぶのだそうです。今回のワークショップでは、経験豊富な讃井さん、加藤さん、佐藤さんの3人がこの役割を担ってくださった。ほかの人たちははじめて集まったメンバーなので、お互いをよく知らないもの同士でしたが、この仕事は参加者たちがお互いに多少気の許す関係を作らないと、そうそう簡単に共同の作業はできません。及部先生の指示されるままに動作をしていくと、自然と知らない間同士でのこの場での関係が出来上がるように感じられました。

ウォーミング・アップ

- 1) まず、みんなで輪になる。隣の人と手を繋ぐ。次に隣同士が足、肩、頭などどこか一箇所に触れる。それを異なる場所で2、3回やってみる。触る場所が限られるから、苦しい格好、面白い格好になる。笑いが起きる。
- 2) 6人1組になって輪を作る。目をつぶって手を前に差し出す。触れ合う手を握り、絡み合う手を放さずに繋いだまま、元の輪になるようにほぐしていく。これが難しい。結局ほぐして元に戻る場合といくら



写真6 ウォーミングアップその1



写真7 ウォーミングアップその2

やっても出来ない場合がある（二つの輪になってしまおうとだめらしい）。この辺で仲間意識やある種の達成感が出てくる。

- 3) 2人1組になる。毛糸で自分の顔を画用紙の上に描く（毛糸は切らない）。次に相手の顔を毛糸で描く。これは思うように描けないがそれらしいものができる。
- 4) この2人1組で、紙にクレヨンでお互いの似顔絵を一筆書きで描く。次に相手の顔だけを見て（画用紙は見ないで）一筆書きで似顔絵を描く。相手の顔だけを見て描くとこれはなかなか傑作が生まれるものらしい。つまり、相手の人から受けた印象が有る意味では鮮明に出てくることもある。意外にもその人物の本質が表れるのである。
- 5) さて、ここから本題の序。これまではコミュニケーションするための序の序の口だったわけだ。なにか不定形な紙を渡され、隣室の展示から得た震災の印象を描くことを指示される。不定形な紙切れは実は大きな模造紙一枚を適当にちぎったものであり、それを元一枚に戻してみると、さてさて現れるのは各人各様の震災印象の合作のできあがりというわけであった。



写真8 震災印象の合作。布絵作成に入る前に各々のイメージが膨らんだ

布絵づくり

- 6) ここからが本格的布絵づくり。準備段階で並べられたさまざまな色や風合いを持つ布地や毛糸を見ただけでその山と積まれた材料にエネルギーが詰まっていると感じた参加者もいた。そして、こんな風につぶやいていた。

「まずは準備をはじめ。色とりどりの毛糸、木綿、化繊、絹、サテン、様々な布地が袋から出てくる。机の上に並べると1つの長机には乗り切らず、長机を2台用意する。

毛糸や布地を触りながら並べているだけで、手に感じる感触と、目に入ってくる色味の心地よさから、心が和み、楽しい気持ちになる。並べられたさまざまな種類の毛糸や布地。実は素材がそこに集まっていること自体にも、エネルギーの集積があるように感じた。ワークショップに集まってくる人のエネルギーと同じぐらい、素材として用意されているものにもエネルギーがある。これだけの多種の素材を選択し、集めることはそれ自体、人のエネルギーがずいぶんとかかるものだ。布地は、まだ洋服の形そのままのものや、スカーフのままのものもあり「これは誰がきていたのかな？」と思わせる。それぞれの素材に、単に素材だという以上のエネルギーがここに集まるまでにくっついてきている。それを私たちはワークショップの素材として使う。布地はテープ状になるように、細く裂いていく。布の端にはさみで切り込みを入れ、切り口ができたなら左右に引っ張って、ビリビリビリとひと思いに引っ張るのだ。完全に切り離さないで、布の端まで切れたら、少し残して、次の列につなげて逆方向に同じように切る。そうすると、長い長いテープ状のものができる。ビリビリビリビリ、楽しい。この作業がワークショップに入るまえのウォームアップになった。」

- 7) 作品は6人1組で、2点が制作された。まずはタイトル「紅蓮の炎から逃れて、日常を取り戻す人々」のグループのつぶやきから、なにを描こうとしたのかを辿ってみることにしよう。

火災旋風に巻かれた被服廠跡では当時南無妙法蓮華経や南無阿弥陀仏の声が絶えなかったというが、その声を布絵で表現しようという案も出た。参加者のなかでは無口であった一人の女性が赤い布や赤い毛糸でそれを表そうとしたが、毛糸がうまく貼りつかず、結局、黄色布地の渦で、火災が渦巻くなかを読経の声が一際こだまするようにと心を決めた模様。



写真9 火災旋風の上を流れる読経の声の表現を工夫する

紅蓮の炎を白い布地の上に大胆に斜めに置き、炎が走り抜けて行くイメージを作り、それを軸に左と右を破壊と創造のイメージで住み分ける構想である。左半分には崩壊した建物を描いていき、右半分は、絶望した人々が立ち上がり、前進しようとする姿、“希望”が描かれた。それぞれが自分で得たイメージを語り合い、以上の構図がまとまると、その後はみなそれぞれの担当する場面をいかに演出するかで必死。無言の作業が続いた。

小学6年生の男児は黙々と黒い布で死んだ人、灰色で死にそうな人をあらわそうと鋏で布地を切り込む。倒れて亡くなった人は腕立て伏せの格好にする。とこだわり、そのかたち作りに苦心の様子である。かと思えば、義捐床屋の様子にしきりに感銘を受けた女性は「徹底的に具象で迫る」と宣言、震災の混乱にもかかわらず、身なりをキチンと整える人々に感心したのだという。

出来上がった布絵は、画面の下から上にかけて時間が経過している。下部は震災直後。左下は崩壊した建物、逃げ惑う人々とそれを追う炎。右下は救いを求めた人々のこだまする読経。中央は混乱した町の様子。左は橋から落ちる人。右は行方のわからな



写真10 支えあう大きな手と手を表現する

い家族を捜す人たち。鎮火した黒煙。やがて、画面右上では、救援物資が各地方から船でやって来て、人々が新しい橋を作りはじめ、子どもらが遊戯をしたりしている様子が描かれている。

次に「渦巻く炎、そして、共に支えあう希望の手」の作成班について紹介しよう。

関東大震災の絵巻を鑑賞して、それぞれがまず強い印象を受けたものが“渦巻く炎”だった。布絵のいたるところにある渦の形は、それぞれが感じた炎を表わす。震災の恐ろしさというのは、「人々の間に差別の意識や自分の身勝手さが表面化してくることはないだろうか」と考え、これからやってくるかも知れない大地震に備えて、地域でのつながりを作れたらいいねと話しながら作業が進んだ。かなりまでも現実的な議論をしたグループである。渦を巻く炎や人々の残酷さを表した布絵から、共に支えあう希望の手が左右より伸び、画面真ん中のピンクは、人を思いやり、癒しあう象徴としようということになった。人の輪をイメージした波を打つ一本の毛糸がこれらを大きく包み込み画面いっぱい大きな円を描き、「周りの人と交流していきたい、そして、今日ここでの出会いも大切にしたいね」といいながら布絵が完成した。

8) 以上が布絵制作の過程であったが、このワークショップに参加した方々の感想が寄せられているので、紹介しておこう。

■人々と関わりながら体を動かしたり絵を描いたりするワークショップをいくつか行い、いよいよ本題の関東大震災の話に入っていました。4人ずつ3つのグループに分かれ関東大震災のシーンを再現しました。ストップモーションで震災時の1場面を作っていくものです。この頃には参加者間でのコミュニケーションはスムーズに行われ、誰が何の役をやるかはすぐに決まるようになっていました。火に追われ逃げ惑う中、足をつかまれて動けなくなってしまうシーン、火に追われながらもケガ人を担架で運ぶシーン、協力し合い逃げる家族のシーン。震災を資料で見るだけでなく、自分自身をその状況に置いて申から考えていくような面白いワークショップでした。参加者全員が少しずつ関東大震災への思考を巡らせ始めていたように思います。

今回のワークショップは「関東大震災について」という重い課題でありながら終始楽しい雰囲気が進みました。それは布絵を作り上げるという目標があったからだと思

います。関東大震災の時に起きた様々な出来事を見つめ、人々と意見を交換し合いながら一つのものを作り上げていったのはひじょうに貴重な体験になりました。(須田真美)

■美術館で来館者の鑑賞のケアも職業としている私としては、もうすこし丁寧に展示を見る声かけや、動線があったらより良かったかなと感じた。作品を見ることは意外と丁寧にしないと、実は鑑賞者はよく見ることができていないということがある。展示室にあったレプリカの絵巻が大変よくできていたので、これを手に取って、展示ケース内では見えない部分までよく見て、見ながらワークショップ参加者たちが発言し合うようなステップがあったら、もっと発見があったのではないだろうか。この鑑賞体験が、次の布絵を作っていくときに共有体験の底流に流れるものとして重要になっていくのではないかと。(稲庭彩和子)

■他グループの作品をのぞいてみたところ、方向性が全く違っていて驚いた。鶴の模様の布を大胆に使ったり、人物を一人一人、布で表現したりと、大変具象的な布絵になっていた。それに対して、自分のグループでは、旋風や助け合いなどが、各自のイメージで抽象的に表現されているように思われた。どちらがうまいとかではなく、グループの個性が程良く反映されているように感じた。再度、自分の作った部分と他の部分を見直して、何を付け加えていけばよいかを考えてみた。使う布によって全然異なる旋風が表現できるので、激しい炎、どす黒い炎、だけではなく、綺麗な旋風も作ってみることにした。たまたま手元にあった花柄の布を使ってみると、旋風が花のように見え、楽しくてどんどん作っていった。取りあえず、激しさと美しさという炎の持っている両義的な性格、といったかんじで自分なりに勝手に理屈付けてみることにしたが、どうやら、他の人も、真っ赤な炎の柱の横に、うすいピンクの布で大河のような流れを作っていたりと、同じような感覚で表現していたようであった。共同作業であることから、お互いになんとか影響を受けているようで興味深かった。(高野宏康)

■関東大震災の展示を通じて感じたものを、布絵により表現するというのは、難しいのではないかと始めは感じておりました。しかし、グループで震災について話しながら作業を進めていくうちに、個人個人で考えられる以上のイメージをつかむことができたと思います。共同の作業を行っていく中で、それぞれ個人が思い描いていた震

災に対する恐怖や残酷な事柄を表現するだけでなく、将来に通じる希望までも表したいと、皆の気持が変化していきました。(北田修)

以上は、今回の公開展示および公開研究会の報告ですが、アンケートの回答として、次のような一文をよせていただきました。この展示を見る方々に、普段は気づけなかった心の深いところにある思いを呼び起こさせるものであったことに、むしろ、企画当事者として感動させられました。そのアンケートから引用させていただき、まとめと感謝の言葉に換えたいと思います。

■数年前に他界した私の祖母は、関東大震災を経験しています。祖母は大分県生まれですが、11、12歳のころに、当時の流行り病で父母とも亡くしてしまい、その後東京の親戚の家に預けられ、そこで関東大震災に遭いました。「一面、火の海だった」と、私は関東大震災の話を小さいころに何度となく祖母から聞かされてきました。当時の私には、頭では想像するものの、どこか遠いところの話のようにはか捉えられず、実は、祖母に震災の話を聞いていたということさえ、もう何十年も忘れていたのです。ところが、今回のイベントに参加させていただいて突然思い出したのです。子供のころに両親を亡くし、その後引き取られた先で震災に遭い、そして、第二次世界大戦までも経験した祖母の人生は幸せだったのだろうか、祖母の人生を振り返りました。展示されていた震災の子供の絵が、当時の祖母の年齢にも重なり、祖母も同じような絵を描いたのだろうかと思像しました。

布絵づくりワークショップに参加された方々は以下の通りです。

指 導：及部克人(武蔵野美術大学名誉教授)

ファシリテーター：加藤寛子、佐藤愛美、讚井明弥子

参 加 者：稲庭彩和子、毛受雄一、須田真実、永田雅人、渡邊嘉子、北原糸子、片尾一美、高野宏康、北田修、北田晋稔、藤川美代子、佐藤愛美、小林明仁、小山悠 (順不同)

なお、企画にご協力いただいた展示実施委員会、常民文化研究所、非文字資料研究センター事務局の方々に深く感謝申し上げます。(この項、北原)